青い小さな葡萄

遠藤周作

青い小さな葡萄＝遠藤周作

講談社

青い小さな葡萄
昭和四十六年八月二十四日　第一刷発行

著　者　遠藤周作
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号・一一二
電話・東京（九四五）一一一一（大代表）振替・東京三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
定　価　五二〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
© Shusaku Endō 1971. Printed in Japan

0093-125354-2253（0）（文1）

目次

第一章　5
第二章　81
第三章　185
あとがき　222

装幀＝岩本　正雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

青い小さな葡萄

第一章

I

駅前の時計が十一時をうった時、アセチレン・ランプの下で生牡蠣をひさいでいた内儀が大きなあくびをした。

「御苦労だな。もう十一時じゃないか」

通りかかった巡査が黒マントの襟に首をうずめてたずねた。

「一杯やっていっておくれよ。今夜は客一人ないんだから」内儀は不機嫌に肩をすぼめ、牡蠣のなかにシトロンを入れ、「ああ、リヨンはいやだ。いやだ。復活祭までは霧ばかしでさ」

「気がめいるよ、全く。酒はいらないぜ。勤務中だから」

その夜はいつもより霧がひどかった。おまけに、細かい雨がともなっていた。ソーヌ河からたちのぼる霧は河岸の柵やルノオ工場の壁にぶつかり、広場の歩道をはいまわっていた。歩道は瘤だらけの橡の並木が震え脱ぎすてた枯葉で泥んこに汚れている。うすい黄ばんだ霧の膜のなかに青い灯が泣いているようにうるんでいる。時々、広場のむこうから、ヘッド・ライトを反射させて、トラックがその膜をつきやぶる。けれども幌をつけた車体がとおりすぎると黄いろくにごった霧の渦がまち構えていたようになだれこむのだった。

一人のやせた小さな男が寝しずまったゾラ町の方から千鳥足でやって来た。

ルノオの出張店の横に小さな飲み屋がコサック亭と書いたネオンを明滅させていた。ペラッシュ駅から夜ふけにおりてきた旅人を相手にする徹夜の居酒屋である。

男はしばらくたちどまり、それから一寸よろよろしながら歩きだしたが、また気をとりなおしたと見えて、今度は威勢よく酒場の戸を押した。

「チェッ、外はひでえ霧だが、ここはすげえ煙草の煙だぜ」

踊場の上から朦々たる紫煙のなかをのぞきこんで、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「今晩は、デデ。どうせここだろうと思ったよ。おや、この店はいつから黄色人をやとったんだい」

やせた小さな男はあぶなげな足どりで階段をおり、バーテンの前にすわりこみ、なにかをノートに書きこんでいた黄色人のボーイをじろじろとみつめた。

「なにを飲むんですか」黄色人のボーイは酔っぱらいから顔をそらせ、バーテン台の一点に眼をおとした。

「気にくわねえな」酔っぱらいは台にうつぶせ、両腕の上に顎をのせながら、からみはじめた。「全く気にくわねえな。お前にいじられたコップならきいろくなるだろうよ。俺はきいろい指でいじられたコップで酒は呑みたくねえんだ」

ボーイは顔をこわばらせ、両腕をたれたまま、じっとしていた。それから諦めたように水道の蛇口をひねり、よごれた皿やコップを洗いだした。

「おや、おめえ、俺になにも出さない気か」

「しずかにしろよ」

さきほどデデとよばれた男が横あいから声をかけた。この男は酔っぱらいに比べると、どことなく、どっしりとした落着きがあって工場の組長という感じがする。「労働者週報」を右手にもって彼はゆっくりと杯をなめていた。

「怒らないでくれな」すまなそうにボーイにむかって「酔わなきゃ誰だっていい男なんだ。心に溜っていることを酔えば吐きたくなるもんだね。あんたは学生かね」

救われたように黄色人のボーイは溜息をついた。「かせがなくちゃなりません」

「そうだろ」デデは毛のはえた太い指先を一寸、舐めながら「この前飲みにきた時、あんたはまだ働いていなかったからな。ここで雇われているのは、あんたと、あの女中だけなんだな」

「そういうわけです。もっとも、私の方は一週間のうち、三度しか、ここに来ませんが」

「あの女中、エバとか言ったな。ポーランドの娘だそうじゃないか。どうしてここの亭主はあんな、斜視(すがめ)の、肺病やみみたいな娘を使うのかね。体でも悪いんじゃないのか。始終、咳ばかししているぜ」

二人の話をうち消すため、酔っぱらいは手を伸ばしてラジオのスイッチをひねった。ルクサンブルグの深夜放送から甘ったるい女の唄声がながれてきた。

あなたに話してきかせよう

ある日　ある時　アルロンの町……

「気にくわねえな。全く気にくわねえな」彼はダイヤルを変えた。「どいつも、こいつも甘い恋唄ときてやがらあ」

今度は太いしっかりとした男のバスがきこえた。今日、最後の政治解説である。

「スランスキイ、クルマンティス、スラングなどチェコ共産党旧首脳部は裏切とスパイ行為とにより、本日、プラーグにて裁判されました。英仏の新聞記者は裁判に出席することを禁じられましたが、確実なすじによりますと、被告は一様に党から押しつけられた罪状を認めたそうであります。これはハンガリーのミンゼンチイ裁判でもそうでしたが、やはり、われわれには共産国裁判の謎として考えられるのであります。のみならず彼等被告には常にスパイ行為とかプロレタリアへの裏切という抽象的罪状のみが与えられ、われわれ

の裁判のように具体的な事実をしめすことがありません。こうした曖昧な罪状を被告が理由なしに肯定したとは考えられないのであります。もし拷問や強制が彼等に……」

「チェッ、気にくわねえな」酔っぱらいはラジオをとめて叫んだ。「全く、全く気にくわねえ退屈な街よ。雨ばかし降りゃがってさ。毎日、毎日、おなじ唄、おなじ出来ごとばかりじゃないか。おーい、ここには女の子はいねえのか」

エバはエプロンの下に手を入れ、やせこけた体を壁にもたらせている。デデが言ったことは本当だった。皮膚の色が鉛色に濁ったこの娘は時々、拳を口にあてて、力のない空咳をした。そして玉つきをしている街の若者たちが吐く煙草の煙をものうげな手つきで追い払った。

土曜日の夜なので、町の青年たちは一帳羅の上衣をきこみ、頭をテカテカに光らせてキイを動かしてはいたが、ゲームにはすっかり飽きたらしく、白けた脂気のない表情をしている。雨をおかしてまでレプュブリック街に映画を観にいく勇気もない。

「眠いなあ」彼等の一人があくびをしながら「外は霧だし、さ。いやだねえ。半どんの日

だというのに、親爺(パトロン)の奴、四時まで働かせるんだからなあ」

酒場のドアを押しあけ一組の老人夫婦が不安そうな顔をのぞかせた。老人はふるぼけて羊羹色になったオーバーを着こみ、これも四隅がもうすっかり擦切れて色のあせた大きなトランクをひきずっている。老婆は小間物袋と男用の雨傘を手にもっていた。

「戸をしめて下さいな」エバは咳きこみながら彼等に近づいていった。

「わしらはボルドオ行きの汽車がくるまでここに待たしてもらいたいのだが、お嬢さん」老人はおそるおそる答えた。「だが、もしなにか飲まにゃ、いかんとしたら」

「出ましょうよ。お父さん」老婆は夫の袖を引っぱった。

彼等がふたたび戸を押して外に去っていくと、ペラッシュ駅の方から外の霧を通して拡声器のもの悲しい、かすかな声がきこえてきた。

——十一時半着、アビニオン—マルセイユ行急行は間もなく参ります。十一時半着、アビニオン—マルセイユ行急行は——

十一時半かっきりにアビニオン―マルセイユ行急行は霧雨に煙るリヨン駅に停車した。機関車が喘ぎながら吐き出す水蒸気が雨でひかった線路の上を白くながれていく。カンテラをもった駅員が鉄棒で、まだ湯気のたっている車輛をひとつ、ひとつ叩いて通りすぎていった。トランクをさげた五、六人の男女がさむざむとしたプラットホームから思い思いの方向にちらばっていった。駅前に残っていた三台のふるぼけたタクシーが客をあきらめて闇のなかに消えてしまうと、広場はふたたび老人のように黙りこんだ。雨あしは先ほどより、すこしは衰えたが、霧は相変らず、うす黄色い膜であたりをつつんでいた。

牡蠣屋の内儀は籠の中の生牡蠣に油紙をかぶせていたが、その時駅の西口から出てきた一人の男が広場の真中にたちどまり、鞄を石畳の上において、あたりを見まわしているのに気がついた。

(今の汽車で着いたんだね。と内儀は考えた。さしずめ駅か、コサック亭で夜をあかさねばならない手合いだろう)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com